



Title	『ポール・ロワイヤル論理学』における観念の明晰性と判明性について
Author(s)	武田, 裕紀
Citation	Gallia. 2024, 63, p. 13-28
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/95755
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『ポール・ロワイヤル論理学』における観念の 明晰性と判明性について

武田 裕紀

問題の所在

『ポール・ロワイヤル論理学』¹⁾のタイトルで広く親しまれている『論理学、すなわち思考の技術』が、アルノーとニコルによって出版されたのは1662年のことである。『省察』の仏訳者であるリュイヌ公の子息を教育する目的で書かれたこの書物は、観念から出発するという論理学としては異色の構成ゆえに「デカルト的」と形容され、旧来のアリストテレス論理学を刷新しただけでなく、19世紀に至るまで論理学の標準的な教科書として版を重ねることになった。その後、20世紀初頭の記号論理学の台頭により、いったんはその歴史的使命を全うするが、1960年代に入ると、フーコーによってデカルトに代表される古典主義のエピステーメの典型として、またチョムスキーによってデカルト派言語学の理論的支柱として、新たな光が投げかけられ、今度は思想史における一里塚として命を吹き返すことになった。

このように『ポール・ロワイヤル論理学』は、古今を通してデカルトの名前と分かちがたく結びついている。たしかに、観念、判断、推論、方法の四部構成からなるこの新しい論理学は、「観念を抱懐する *concevoir* こと」から出発しており、ここにコギトの思惟様態から世界を覗くデカルト哲学の強い影響を見て取ることは容易い。それだけでなく『ポール・ロワイヤル論理学』には、デカルトからの引用が大量に鏤められている。アルノー本人²⁾が「第四反論」に関わった『省察』、

* 本研究は「17世紀におけるマテーシスの確実性・射程・有用性に関する研究」（基盤研究(C)、研究代表者：武田裕紀、課題番号：20K00282）の研究成果の一部である。

1) 『ポール・ロワイヤル論理学』の引用は、Antoine Arnauld et Pierre Nicole, *La Logique ou l'art de penser*, éd. par D. Descotes, Honoré Champion, 2014（以下、LAP、と略記しページ数を記す）による。なお、デコット版は1664年の第二版を底本とし、末尾にヴァリエントを収録している。そのため、それ以前に流布していた第五版（1683）を底本とした刊本と章番号が異なっている。本稿では、引用および参照ページはデコット版に拠るが、章番号についてはすでに人口に膾炙していると思われる第五版に従う。邦訳は、宮原琢磨『哲学基礎講読0091』（『論理学、別名思考の技法——一般的規則のほかに、判断を形成するのに必要な新しい規則がいくつか含まれる』研究序説ならびに全訳と訳注）日本大学通信教育部、1998年〔非売品〕、および山田弘明・小沢明也訳『ポール・ロワイヤル論理学』法政大学出版局、2021年の二種類が存在し、いずれも第五版に拠っている（ただし底本は異なる）。なお本稿では「明晰な」の対義語 *obscur* を「不明瞭な」と、また「判明な」の対義語 *confus* を「曖昧な」と訳す。

デコット版を選んだ理由は、これが現在もっとも優れた刊本であることのほかに、本稿の趣旨である「デカルト主義とそこからの逸脱」を析出するには、聖体や聖書解釈学の問題を念頭に置いて書かれた象徴主義的な記号作用に関する記述を含む第五版よりも、論理学として筋の通った構成をとっている第二版の方が、われわれにとって好都合だからである。

2) アルノーとニコルの二名がクレジットされている『ポール・ロワイヤル論理学』の執筆分担

『方法序説』、『哲学の原理』、1664年の第二版では草稿の形で入手した『精神指導の規則』からの引用が、ある時はテキストそのままに、またある時はアルノーの文脈に嵌め込まれつつパラフレーズされた形で確認できる。

このように、著作の大枠や間テキスト性の点で、デカルトと深い関係を取り結んでいることは容易に看取できるとしても、しかしながらアルノーは「第四反論」の中で、デカルトの示すような観念の明晰判明性だけでは真理の基準としては不十分であると異議を申し立ててはいなかったか。また、執筆時には存命中だったパスカルから『幾何学的精神について』の草稿を手に入れて、デカルトとは異質の認識論を語るこの小品からもふんだんに引用していたのではなかったか。それゆえ本稿では、「デカルト的」という特徴は大枠で肯定しながらも、その内実については相当に換骨奪胎されているのではないかという見通しのもと、著作の細部を検討していきたい³⁾。

その際の導きの糸として、観念の「明晰性」と「判明性」を取り上げることにする。このいかにもデカルト的な、そしてアルノーにとっても基軸的な用語は、果たしてデカルトが自身の体系の中で意義付けたような仕方で、『ポール・ロワイヤル論理学』の中でも機能しているのだろうか。この問題は、観念を扱う第1部の中でも、とりわけ前半部にあたる第1～9章にて集中的に扱われる。本稿の課題は、具体的には主にこの前半部における観念の明晰性と判明性について、デカルトとの対決という契機から解明することである。

本稿の構成は以下のとおりである。観念が明晰であることすなわちそれ自体はつきりと認識できること、および観念が判明であることすなわち他の観念と区別できること、この二つの事項を検討することで、第1章では、『ポール・ロワイヤル論理学』においては、デカルトとは異なり、観念の判明な把握が観念の明晰性の確保に先行すること、そして判明に把握された諸観念の妥当な系列が事物の明晰な認識へとつながることを示す。第2章では、かようなプライオリティを帯びた判明性を、観念の「区別」の観点から検討する。第1節では、デカルトにおける実在的区別、様態的区別、およびそれらの区別をなすための精神の操作である「排除」と「抽象」について確認したのち、『ポール・ロワイヤル論理学』が「排除」

に関する先行研究はいくつかあるが、確実なことは分かっていない。この問題については、Antony Mackenna, «La composition de la "Logique" de Port-Royal», in *Revue philosophique de la France et de l'étranger*, 1986, p. 183-206、広田昌義「『パンセ』と『ポール・ロワイヤル論理学』——『ポール・ロワイヤル論理学』第二版第一部第九章について」『理想』578号、1981, p. 42-54 参照。

蓋然的に言えるのは、ほとんどがアルノーの手によるものであること、ニコルが担当した可能性が考えられるのは、内容の観点から道德に関する章、彼が『パンセ』の遺稿管理に携わっていたという事実から『パンセ』の引用とそれに付随する段落、当時アルノーが亡命中だったという外的事情から第五版での追加箇所、ということである。本稿では道德に関する章は内容上オミットし、また『パンセ』からの引用も直接は扱わないので、基本的にアルノーの著作として考察する。それゆえ分析にあたっては、『省察』の第四反論などアルノーが『ポール・ロワイヤル論理学』以前に執筆した文献も参照する。

3) より広範な思想的な観点から、アルノー・ロワイヤルの反デカルト主義的側面を指摘したもののとしては、Steven Nadler, «Cartesianism and Port-Royal», in *The Monist*, Vol. 71, No. 4, 1988, p. 573-584.

による「実在的区別」を受け入れていることを明らかにする。しかる後に第2節では、精神の抽象による様態的区別をデカルトから形式的に受け継ぎつつも、ただし、その操作によって実体への考察抜きで様態を切り出すことが可能になること、また切り出された様態の観念が判明であるかぎりにおいて明晰な観念を構成するための要素とみなしうることを、この二点において『ポール・ロワイヤル論理学』がデカルトから隔たっていることを示し、ここにアルノーたちの独自の立ち位置を見出す。

1. 観念から出発すること

1-1. 観念という語はデカルトよりも広い領域をカヴァーし、判断や命題をも対象とする

『ポール・ロワイヤル論理学』の劈頭は、デカルト的と形容されるにふさわしく、観念の問題を取り上げている。ここで観念とは、「太陽、地球、木、丸、四角、思考、存在」といったものを「われわれが自らに表象するところの形態」(LAP. 157)、すなわち自然的物体から数学的对象さらには抽象物まで含めた表象の総称である。第三版以降では、「それについて何の明示的な判断を形成せずに」(LAP. 157, n. 3)と書き加えられているように、判断を経る前の生の表象であることが伺われる。

ところが、その後の記述にも目を通していくとアルノーの姿勢は一貫していないところがあって、たとえば「地球は丸い」という命題に対する肯定ないし否定のような判断に属する事柄まで観念に数えている⁴⁾。そうなると、アルノーが観念という語で指し示す領域はデカルトよりも広い。というのも、デカルトの言う「観念」は、人間とかキマイラとか神とか天使のような「いわばものの像であって、これにのみ、本来、観念という名はあてはま」り、他方で、意志、感情、判断はそのときに「当の事物の似姿以上の何ものかを意識している⁵⁾」(AT. VII, 37)ため、一義的には観念とは言い難いからである。アルノーの言う観念は、デカルトのようにさまざまなものの像だけでなく、その操作に関わる因子を含むさらに広い領域をカヴァーするものである。

それだけではなく、アルノーは「地球は丸い」のような命題をも観念と見做している節がある。というのも、第2部第7章でアルノーは、虚偽は観念そのものには見られないのかという問いを立てるのだが⁶⁾、その際に単純観念には虚偽はな

4) デコットも注釈の中で「non という語は観念の記号ではなくて、知的操作の記号である。否定辞はそれゆえ、表象的要素とこの操作に対応する要素とから合成されたものである」と述べている。(LAP. 163, n. 15)

5) 別の箇所ではデカルトは、思惟の形相はすべて観念であると述べていて、その意味においては、アルノーにおける「観念」の語義の不定性はデカルトのそれを反映していると言えなくもない。デカルトにおける「観念」を一義的に理解することの困難については、村上勝三『観念と存在 デカルト研究 1』知泉書館、2004, p. 103-105。デカルトからの引用は、*Œuvres de Descartes, publiées par Ch. Adam & P. Tannery, Paris, la nouvelle édition, 1996.* (= AT 版)による。以下、AT 版の巻数とページ数を記す。傍点強調はすべて論者による。

6) アルノーが「有名な問題」(LAP. 275)と呼んでいるのは、デカルトの言う質料的虚偽のことである。この問題に関しては、Jean-Claude Pariente, *L'Analyse du Langage à Port-Royal*,

いとしたうえで、ただし「複合観念においては虚偽がある」と述べて、その複合観念の例として「フィリップスの息子アレクサンドロスがペルシアを破った」(IAP. 277) というような命題——正確には関係代名詞で形容された語を含む——を挙げているからである。

このように『ポール・ロワイヤル論理学』が観念という語で指し示している領域は、狭義には思考の要素となるものであるが、それにとどまらず、広義には、推論やなんらかの知識によって結びつけられた命題およびそれを関係代名詞によって名詞化した複合観念、さらにはその命題に対する判断まで含む、いわば音声となんらかの記号関係を取り結ぶシニフィエとして、言語思考そのものを成立せしめているものの総体である。

1-2. 観念の判明性は明晰性に先行する

こうしたアルノーの立場は、「私は考える、ゆえに私はある」の解釈にも反映されている。なおアルノーは、「私は考える、ゆえに私はある」という命題をデカルトとことさらに結び付けることをせず、より一般的にアウグスティヌスに由来すると考えていて、それゆえ、デカルトの学説を祖述する意図がとくにあるわけではないことに留意しておこう。⁷⁾

「…」我々の思惟よりも判明に認知するものは何もないし、「私は考える、ゆえに私はある」という命題よりも我々にとってより明晰であり得るような命題は何もないからである。しかるに、もし「ある」とは何か、「考える」とは何かを我々が判明に認知していないとするならば、この命題についていかなる確実性も持たないことになってしまうであろう。そういうわけで、これらの名辞を説明するよう決して求めてはならない。なぜなら、それは万人によって大変よく理解されている名辞のひとつなので、それをさらに説明しようとする、かえって曖昧にしてしまうからである。(IAP. 168-9)

まず注目すべきは、「私は考える、ゆえに私はある」という命題よりも明晰であり得るものは何もない」という点である。デカルトなら、命題そのものに対しては「確実」「明証 *évident*」などの語を使い（もちろんアルノーも用いる）、「明晰」は用いないであろう。これに対してアルノーは命題を明晰と形容する。このような語法が可能になるのは、彼にとっては命題も観念（複合観念）となりうるのだから、この場合「私は考える、ゆえに私はある」という命題も「考える私の存在」という複合観念となり、それゆえ、明晰な認知の対象とされるためである。アルノーにとっての命題は、観念に数えられるだけでなく、明晰な認知の対象と

Les Editions de Minuit, 1985, p. 72-82.

7) 明晰な思考の範型としての「考える我」の認識は第四部の「方法」でも再度取り上げられるが、「少なくとも自分が存在するかどうか、考えているかどうか [...] は誰も疑うことはできない」(IAP. 508) と述べる際に依拠する典拠は、デカルトではなくアウグスティヌス（デコットの注によると、*Soliloquia*, II, I や *De Civitate Dei*, XI, 26 など）である。

もなりうる。

次いで注目すべきは、「万人の一致する名辞」、たとえば「考える」「ある」といった言葉は「判明な認知」を与えてくれる、という点である。すなわち、名辞と結びついた観念を相互に妥当な仕方では区別すること（つまり判明に認知すること）が、命題を明晰に知るための条件となっているわけである。こうして判明性は明晰性に対して認識の順序として先行する。それゆえに、「私は考える、ゆえに私はある」を明晰に認知するためには、先だって「思う」「ある」を判明に知らなければならぬ。

判明であることと明晰であることとの関係を、まずデカルトの側からおさらいしておこう。『哲学の原理』第1部44、45項によると、明晰な認知とは、「注意している精神に現前し明示されている認知」であり、他方、判明な認知とは、「明晰であるとともに、他のすべてのものから分離され、峻別されて、自らのうちに明晰なもの以外の何物も含まないような認識」である。苦痛の認知を例にとると、この苦痛は、その人の内部では極めて明晰であるが、常に判明であるとは限らない。なぜなら「人々が明晰に認知するのは、ただ苦痛の感覚だけであるのに、この苦痛に類似したものが痛む部分に存在していると思ひ込むから」である。それゆえ、「認知は判明でなくても、明晰であり得るが、逆に、明晰でなければ、いかなる認知も判明ではありえない」(AT. VIII-1, 21-22)⁸⁾。

これに対してアルノーは、「ある観念は判明でなくても、それが我々を強く刺激するときには、明晰であると言うことができる」(LAP. 210)と述べて、まずはデカルトの見解に一応の敬意は払いつつも、続けて次のように言う。

それにもかかわらず、あらゆる観念は明晰である限りは判明であると言えるし、観念の不明瞭さはその曖昧さからしか生じないと言える。たとえば、痛みにおいて、我々を刺激するただひとつの感覚は明晰であり判明でもある。しかし、不明瞭な事柄、つまりその感覚が我々の手の内にあるということは、我々には全く明晰ではない。(LAP. 210)

アルノーの本意はこちらにあることは明らかであり、これはまさにデカルトに対する反論、否、むしろ立場の相違の表明である。アルノーによれば、デカルトとは異なって、「あらゆる観念は明晰である限りは判明であり」、「観念の不明瞭さはその曖昧さからしか生じない」。そしてこれをデカルトと同じく痛みを例に説明する。それによると、この苦痛に類似したものが痛む部分——たとえば手——に存在していると思ひ込むのは、判明ではない認知なのではなくて、明晰でない認知なのである。

なぜ両者の間にこのような見解の相違が生じるのであろうか。それは、デカルトにとっては、「思惟実体と延長実体およびその様態、あるいは永遠真理」のように、「あたかも、直観している目の前に現れるものが、十分に強く、はっきりと目

8) ここでは、次章で見る実体の観念と様態の観念の区別とその紐づけが問題になっている。

を刺激する」(AT. VIII-1, 22) ことが観念の明晰性であり、次いで諸観念が適切に区別されるとき判明であるということになるのに対し、アルノーにとっては、しっかりと区別されたある事物の様態の観念が、実体とであれその様態同士とであれ、適切に結びつけられることで明晰な認知が得られるからである。

1-3. 名辞の万人の一致を要求するが、唯名論ではない

引き続き前節冒頭に引用したテキストを分析すると、「われ思うゆえにわれあり」というテーゼに対してだけでなく、観念一般に対して両者が期待する認識論的なコミットメントの相違も見えてくる。

第一に注目すべきは、続く文章「しかるに、もし「ある」とは何か、「考える」とは何かをわれわれが判明に認知していないとするならば、この命題についていかなる確実性も持たないことになってしまうであろう」という点である。これは、「私は考える、ゆえに私はある」の真理性は、「私は考える」、「考えるものは存在する」、「ゆえに私は存在する」という三段論法を構成しているところの「ある」「考える」という名辞の判明なる認識を要求するということである。ところがそうすると、「第五反論」の著者ガッサンディが、「私は考える、ゆえに私はある」は、「私は考える」、「考えるものは存在する」、「ゆえに私は存在する」の中項を欠いた省略三段論法ではないかと問い質したのに抗して、「思惟する我」の真理性はかような推論を通じて得られるものではない、そうではなくてあくまで方法的懷疑を経てこの命題に到達した者が経験する内的な直観によると答弁したデカルトの真意に背馳することになってしまうであろう(AT, VII, 318)。実際のところアルノーは、少なくともデカルト的直観主義を共有していない。

第二に注目すべきことは、「存在する」「考える」といった名辞は、「万人によって大変よく理解されている名辞のひとつなので、それをさらに説明しようとする」と、かえって曖昧にしてしまう」と述べて、真理の基準を万人の一致する言葉に求める点である。翻って、同様の論点を扱っている『哲学の原理』第1部10項は、次のように述べている。「「私は考える、ゆえに私はある」という命題は、あらゆる命題のうち、順序正しく哲学する者なら誰もが出会う最初の最も確実な命題であると、私が言ったとき、だからといって、「思惟とは何であるか」「存在とは何であるか」「確実性とは何であるか」ということを、[...] 上述の命題よりも前に知っておかなければならないことを、否定したわけではなかったけれども、しかし、これらは極めて単純な概念であり、またそれらだけでは、何ら存在する事物の知識を与えてくれないのであるから、それらをわざわざ数え上げるには及ばぬと考えたのである」(AT. VIII-1, 8)。

この第1部10項には「きわめて単純であり自明であるものが、論理学上の定義によってかえって不明瞭にされるということ。そのような単純で自明なものは、探求によって得られた認識の中に数えてはならない」という見出しがつけられている。たしかに、「ある」とか「考える」といった単純で自明なものに対してさらなる説明をしても事柄を不明瞭(アルノーの場合は曖昧)にするという点では、

デカルトとアルノーは一致している。しかしながら説明が不要である理由は、デカルトにとってはそれらが「単純な概念」だからなのに対して、アルノーにとっては「万人によって理解されている名辞」⁹⁾ だからなのである。

このように、デカルトは「存在する事物の知識」を求めている、「単純概念」はそれを与えてくれない、と言うのに対し、アルノーは「明晰（アルノーの言う）な知識」を求めている、「万人の一致する名辞」がそれを与えてくれる、と言う。すなわち、「私は考える、ゆえに私はある」という命題に対して期待している存在論的射程が、デカルトにとっては存在する事物まで到達するのにに対し、アルノーにとっては、観念を分節化する仕方の共有と、分節化された記号の妥当な結合にとどまるのである。

判明な観念を言語化することを重視しているとはいえ——そしてのちには名称の定義を導入するとはいへ——、『ポール・ロワイヤル論理学』の冒頭は、あらかじめあるイギリス人（明らかにホップズ）の唯名論を排除している。アルノーは、ホップズによる「第三反論」の一節、「われわれが理性によって結論することは、[...] ものの名称に関することのみである」、「つまりその意味に関してわれわれが恣意的に結んだ協約にしたがって、ものの名前を首尾よく集めているかを単に見ること」(AT, IX, 138) を引用しつつこれに反論し、「少なくとも明晰判明な観念は、ものの本性 nature についての確固とした実効性のある判断である」(IAP, 166-167) と宣言する。我々が事物について持つ観念には、なるほど、判明な観念と曖昧な観念とが入り混じっているが、しかしそのうちの判明に選び出されて明晰な仕方と連結された「明晰判明な」観念なら、その存在論的射程が事物の存在にまで届くわけではないとしても、事物の本性を含んでいると判断することが許されるというわけである。この点において『ポール・ロワイヤル論理学』は、デカルト的な真理の直観主義にもホップズ的な唯名論にも与しておらず、可能性としては観念を通して事物の真理に接近できるとする立場をとっている。

これまでのわれわれの分析が正しいとするならば、少なくとも明晰性という点に関しては、『ポール・ロワイヤル論理学』はデカルト哲学からずいぶんと隔たっているように見える。観念の明晰性に対して判明性を先行させること、名辞の万人の一致という真理基準を導入すること、分節化された記号の妥当な結合により真理に漸進的に近づけること、こうした姿勢の裏側には、ひとつにはアルノーにとっての究極の真理は「事物における、精神の神に対する関わり」(IAP, 277) によってしか至りつくことができないとする、現世の知識に関する懐疑主義的傾向

9) デコット版の注釈はこの箇所について、デカルトのテキスト群の中でも『省察』などではなく『真理の探究』(AT, X, 523) を参照するように促している。『真理の探究』は、かつては晩年の著作という説が有力であったが、近年、ラジョコノによって1633-4年説、カローとオリヴォーによって初期(1628年か1631年初め)に位置づける説が提出されている。その根拠の一つとして、本稿でも問題にした「われ思う、ゆえにわれあり」の命題の論証が、『省察』の記述とは異なって、「推論 *raisonnement*」によるとされている点を挙げていて、この点はたしかに『ポール・ロワイヤル論理学』と軌を一にするように思われる。René Descartes, *Étude du bon sens, Larecherche de la vérité et autres écrits de jeunesse* (1616-1631), éd. par V. Carraud et G. Olivo, PUF, 2013, p. 233. なお、『真理の探究』の遺稿はクレルスリエによって保管されていたので、アルノーが目を通した可能性はある。

がある¹⁰⁾。この点において、コギトの真理性から、明晰判明な観念を通して、外的世界の實在にせまろうとするデカルトとは一線を画している。

さて、観念を判明に区別し、万人が共有できる名辞によって記号化することの帰結として、観念の「区別 *distinctio* (判明に区別できること)」に関する議論が、引き続き第1部前半での主要なテーマとして俎上にのぼることになる。次章ではこの課題をさらに追及していこう。

2. 観念を区別すること

観念の判明性についてアルノーは、概ねデカルトによる「区別」に関する議論をなぞりながら進むことになるのだが、しかしある地点からデカルトの圏域を離れていく。その道程を検討するに先立って、アルノーによる観念一般の位置づけについて確認しつつ、「区別」の問題——実在的区別や様態的区別——が定位される現場を見ておこう。

第一に、観念のすべてが感覚に由来するわけではなく、ある種の観念は知性に由来する。アルノーは唯物論者ガッサンディを直接的には批判の対象としているが (LAP. 167)、ここには、「先だって感覚になかったものは、知性のうちには何もない」と言うアリストテレス『魂について』を批判しつつ、同様に知性作用による認識を重視するデカルトとの親近性が感じられる。同時に、感覚的認識に対して知性的認識を重視するアウグスティヌス主義者としての立ち位置も看取できる。

第二に、観念と対象の非類似である。我々の誤りの原因は、「対象のうちにあるものは、魂がそれを機会として持った感覚や観念と全く似ていると思い込み」、「熱や色などの感覚を、心の外にある物体の中に移し替えて、それらの観念を形成してしまった」ことにある。この誤った判断のせいで、「感覚的諸性質について不明瞭で曖昧な観念を形成する」(LAP. 212) ことになったわけである。観念がなんらかの対象の現われであることはたしかであるが、しかしその現われが対象と似ていると思ひ込むことは誤謬の原因として厳に戒められる。

観念と対象の非類似というこのような哲学的立場は、思惟実体 (観念の基体) と延長実体 (対象の基体) という区別された二つの実体からなる厳格な二元論へとアルノーを導いていく¹¹⁾。それゆえ、そこから派生する問題群、すなわち、実体

10) この背景には、真理を神との向き合いにおいて見出すアウグスティヌスの照明説があることは明らかである。真なるものを保証するのは、デカルトのように自身に向き合うことで得られる観念そのものの明証性ではなく、神の方へ向き直ることで得られる確実性なのである。その意味でアルノーは、しばしば指摘されるように、多分にアウグスティヌス化されたデカルト、もしくは、数学的真理でさえも神が欺かないことが確保されるまで真と見做しえないとする「神の誠実性」のテーゼを強く読み込んだデカルト解釈といえるだろう。

11) こうした感覚と対象の非類似という態度は、デカルト『世界論』の冒頭「我々が光について持っている感覚像と、[...] この感覚像を我々の内に作り出す対象自体にあるところのもの [...] の間には差異がある」(AT. XI, 3) の一節を想起させるし、この点においてデカルトからの反響を聴き取るのは妥当であろうが、ただしテキストはこの局面で、デカルトではなくキュレネ学派やなんぞくアウグスティヌスの権威に拠って、『神の国』第14巻15章「身体的と言われている諸々の苦痛は、身体に属するのではなく、身体に原因を持ちはするが、身体の中の魂に属する」(LAP. 213) を引用している。そのうえで、「身体の原因」については、デカルト『人間論』によって示された医学的説明に依拠するわけである。ここでも、ア

の観念をいかにして相互に区別するのか、実体の観念とその様態の観念をいかに適切に区別した紐づけるのか、様態の観念同士をいかにして結びつけるのか、といったいわばデカルト的問題を惹起する。

これに関する記述は、第2章「観念がその対象に従って考察される」および第5章「観念の抽象について」に登場する。議論の大筋を辿っておくと、第2章で実体の観念と様態の観念から出発して、観念の対象となる実体や様態を相互に区別する仕方を検討したうえで、しかる後に第5章で、実体から様態を引き離して(抽象して)、様態のみを考察する方法のパターンについて述べている¹²⁾。ここで様態を実体から切り離し、実在との関係をさしあたって括弧に入れることで、第1部9章以降で「名称の定義」——「なにか実在的なものを指し示す」(LAP. 236)「事物の定義」と異なって、観念に対して自由に名付けする定義——を導入するための地ならしをするわけである。それゆえこの二つの章を検討することで、判明な認識の内実を明らかにできるだけでなく、『ポール・ロワイヤル論理学』における認識論の基本ラインのうち、「明証の定義」までの前段部分が析出できるだろう。

2-1. 実在的区別 / 様態的区別、排除 / 抽象

まずは、第2章から見ていこう。ここでは、精神の認知している事柄が表示される仕方に応じて、もの(chose)、ものの在り方(manière de chose)、限定されたもの(chose modifiée)の三つに区別される。ひとつめの「もの」は「それ自体で存続するもの」であり、それゆえ「基体」「実体」と、また二つめの「ものの在り方」は、「様態」「属性 attribut」「性質」と言い換えられている。三つめの「限定されたもの」は、「実体を様態によって限定されたものとして考えること」(LAP. 172)とされる¹³⁾。そして、「真に様態であること」と「見かけ上は様態であること」をはっきりと見きわめるために、様態と実体の関係を明らかにすることが目指される。こうした論点自体は論理学としてはやや認識の問題に深入りしすぎているようにも見えるが、とはいえ本書が観念から出立する以上、まずは観念として表示される実体と様態について吟味し、そして実体間の関係や実体と様態との関係を抑えておこうとするのは、けっして不自然ではない。

この箇所興味深いのは、実体の区別にあたっては「排除」ないし「否定」、様態の区別にあたっては「抽象」という、デカルトに特徴的な操作が用いられている点である¹⁴⁾。そこで、まずはデカルトの説明を聞くことにしよう。

ウグスティヌスと一致するかぎりでのデカルト受容という一般論は成り立っている。

- 12) 間に入る第3章は、実体および様態をアリストテレスのカテゴリー論に即して説明し直し(ただしこの章は著作の初期の状態を反映していると考えられる Vallant 草稿には含まれていない)、第4章は1683年の追補である。したがって著作の構成上も、第2章と第5章が直接つながることになる。
- 13) こうした区別は、文法および様態の観点からは、「実体」と「様態」が実詞 substantif、「限定されたもの」が形容詞ないし付加詞 connontatif とされる。様態が実詞とされるのは、たとえば dureté や prudence のように、ものの性質としてではなく、性質そのものとしてみなされているからである。これらは、『ポール・ロワイヤル文法』(1660)のほば再録である。
- 14) Rudolph Goclenius, *Lexicon Philosophicum*, 1613, p. 14 は、抽象の分類として複合的ないし否定的 (complexae Dicitur negationis) 抽象をたて、「一方について他方から否定する」として

排除による区別が効いてくるのは、実体の認識においてである。人間は、延長実体＝身体と思惟実体＝精神とから成っているが、この二つの実体の観念をどのように区別するのか。それは、抽象によるのではなく排除によるのだ、とデカルトは言う。心身結合した生身の人間から、抽象によって思惟実体の観念を引き抜くというのではない。そうではなくて、身体＝物体と精神はそれぞれ独立した実体であるのだから、それらは、当然のことながら心身結合に先立って、かつそれぞれ独立に存在するものとして知られなければならない。その際の知られ方が、排除というものである。デカルトはメランに宛てて言う、「私の魂について私が持っている観念は、私の魂が身体に依存し、身体と一体化していると私に表示しているのではない、と申し上げただけだとすれば、それは一つの抽象¹⁵⁾」であって、誤った結論しか導かないが、「しかしながら私は、この（私の魂についての）観念は、身体に属するものすべてがそこから排除されたとしても存在しうる一つの実体として私に表示する、と申し上げているのだ¹⁵⁾」と。

それでは排除とはどのような操作なのか。それは、思惟実体は延長実体と相互排除的な様態を持つため、思惟実体から延長や運動などの延長実体の様態を排除するとしても、そのことによって、思惟実体の認識が損なわれることはなく、また逆に、延長実体から思考など思惟実体の様態を取り除くとしても、そのことによって、延長実体の認識が損なわれることはない、ということである。こうして実体の観念そのもののレベルでの区別が可能になる。これをデカルトは「実在的区別 *distinctio realis*」と呼んでいる。『哲学の原理』第1部60項で示されるもっとも行き届いた説明によると、「めいめいが自分は思惟するものであると理解し、他の実体をことごとく、思惟する実体であろうと延長をもつ実体であろうと、思惟によって自己自身から排除¹⁶⁾することができるだけで、(…)他のあらゆる思惟する実体からも、あらゆる物的実体からも、実在的に区別されている」(AT. VIII-1, p. 28)ということである。なおデカルトは、「排除」のことをゴクレニウスなどに倣って「否定 *negatio*」¹⁶⁾と呼ぶこともあり、後で見ると、アルノーが「否定する *nier*」という動詞を用いているのは、こうした語法を受けてのことと考えられる。

他方で、デカルトがメランに対してその有効性を懐疑的に語っていた「抽象」の方は、「様態的区別」で用いられる操作である。様態的区別とは、様態を実体からどのように区別しうるかということであり、ひとつは実体－様態間の区別、もうひとつは同一実体におけるふたつの様態間の区別という、二つのタイプがある

いる。否定は、ゴクレニウスにとって抽象の一分類であるのに対して、デカルトはこれを抽象から独立させている。池田真治（編・著）『抽象の理論をめぐる哲学史——古代から近代まで——』（『抽象と概念形成の哲学史』研究会・研究報告書論集）2021年、p. 56、注12。本報告書は、本稿に関係する内容としてデカルトにおける区別の問題を論じているほか、古代から近代までの抽象理論の通史としても有益である。

15) 1644年5月2日メラン宛書簡(AT. IV, 120)。抽象と排除については、Dugard Murdoch, "Exclusion and Abstraction in Descartes' metaphysics", in *The Philosophy Quarterly*, 1993, Vol. 43, No. 170, p. 38-57.

16) AT. IX-1, p. 200, 215.

が、いずれにしても様態はそれと紐づけられる実体なしには理解することができない。たとえば、後者のタイプについて言えば、四角の石が運動しているとして、四角という形なしで運動という様態を理解できるが、石という実体抜きにはいずれの様態も理解できない、というようなことである。

様態の区別に対するデカルトの評価は、『省察』の「第一答弁」に鮮やかである。そこでデカルトは、反論者のカテルスによって持ち出されたスコトゥスに由来する形相的区別が、自身の様態的区別と同じ概念であることを認めたとうえで、「ものを不十全に概念（抱懷）する知性の抽象によってひとつのものが他のものから判明にそして別々に概念されるためには、形相的区別で事足りる」¹⁷⁾と述べていて、このことから1/ 様態的区別では抽象の操作が用いられる2/ それはものを不十全に概念する、ということが確認できる。ここで「不十全な認識」とは、ある実体の十全な観念であろうもののうち、一面的な観念だけを抽象して認識する——たとえば、形だけを延長や実体の観念を抜きにして抽象する——ことである（AT, III, 475）。

以上の背景を抑えたうえで、『ポール・ロワイヤル論理学』に戻ろう。まずはテキストの引用である。

それゆえ、(1) 真なる様態の本性に関して言えるのは、その様態がなくとも、実体を明晰判明に認識しうるということ、そしてしかしながら、(2) 様態がとり持っている実体——その実体なしでは様態が本性上存在しない——との関係を同時に認識することなく、この様態を明晰に認識することはないということである。

それは、その基体へと判明で明瞭な注意を向けることなくしては、様態を認識することはできないということではない。そうではなくて、実体への関係は、少なくとも曖昧に *confusément* 様態の（認知）の中に含まれているということが示しているのは、様態のこうした（実体との）関係を否定するようなことがあれば、我々が実体について持っていた観念を棄損してしまうことになってしまう、ということである。他方で、(3) 我々が二つの実体、二つのものを認識するときには、それぞれについて持っていた観念を棄損することなく互いを否定 *nier* できるのである。（LAP. 174-175）

コンパクトな記述でやや難解である。順を追って見ていくことにしよう。

1/ まず実在的区別については、引用テキスト下線部 (1) の「その様態がなくとも、実体を明晰判明に認識しうる」、および下線部 (3) の「我々が二つの実体、二つのものを認識するときには、それぞれについて持っていた観念を棄損することなく互いを否定できる」から、明らかにデカルトの学説をそのまま承認してい

17) AT, VII, p. 120. この箇所については、『哲学の原理』第1部62項で言及されていて、「第一答弁」では実在的区別と分かつただけを目的としていたため、「様態的区別」と「理念的区別」とをひっくるめて論じた、と述べている（AT, VIII-1, p. 30.）

ることが分かる。続くテキストは、「延長実体から、思惟実体に属する観念（意志、感覚など）をすべて否定することができるが、だからといって延長実体を判明に認識できなくなるわけではない」（LAP. 175）と、デカルトと同様の説明を敷衍している¹⁸⁾。

このことは、若きアルノーのデカルトへの帰順を示している。思惟実体が、実在的区別によって明晰判明に認識されるという『省察』で示されたテーゼに反発した二十代のアルノーは、「第四反論」で次のように反論する。たしかに『省察』は、精神に思惟するという属性が備わっていることは証明し得ている、しかしだからといって、精神から延長という属性を排除できることを証明し得ているわけではない、それゆえ、精神と物体の実在的区別は確保されておらず、そのためには観念が明晰判明というだけではなく十全（completus、デカルトはadequatusという語もほぼ同義に使う）である、すなわち実体に含まれる特性が全て知られている必要がある、と（AT. VII, 201）。

これに対してデカルトは概ね以下のように応答した（AT. VII, 219-225）。事物を十全に認識するには神の知性が必要であり、有限な被造物にとっては神の啓示がない限りそのようなことは不可能である。それゆえ、二つの事物の間にある実在的な区別をなすにあたって、十全な認識は不可能ゆえ無用であり、ただ、知性の抽象作用によって非十全なものになってしまうよう配慮することで十分である。そのためには、実在的に区別されるものは、「各々がそれ自身による存在として、そして他のすべてのものとは別個のものとして知解されること」が必要であり、したがって、このものは実体であると私に認識されるに足る諸属性をまとめている実体より他に何ものも自分は知解していないということを言えればよい。このための操作がすでに見た「排除」ないし「否定」であった。『ポール・ロワイヤル論理学』のアルノーは、この答弁における実在的区別を受け入れたわけである¹⁹⁾。

2/ このような否定すなわち排除による操作は、実体同士を相互に区別し判明に認識するためには有効であっても、とはいえ、様態に関する判明な観念を形成しうるのかとなると、別立ての議論が必要になる。そのための様態的区別に関する記述が、引用テキストの中間部（下線部2）に相当する。ただしここでの力点の置き方は、デカルトとは異なっているように見える。たしかに様態を実体から区別したり、複数の様態間に区別を設けたりするという点では、デカルトと同じで

18) この実在的区別は、第4部2章で分析の例として再び取り上げられている。

19) もう一点、アルノーは十全な認識が被造物の身には不可能であるということも受け入れた。「神の観念は、神においてしかないと我々が確信している無数に多くの属性が、神のうちにあることを知らせるには十分であるという意味では明晰である。しかし、その観念を、天国における福者が神について持つ観念と比較するならば、それは不明瞭である。そして、我々の精神は有限であるので、無限な対象をたいへん不完全 imparfait にしかとらえることができないという点では、その観念は不完全である」（LAP. 211）。このことは無際限に複雑な仕方では生じる自然現象やほとんど無限に定理を展開することができる数学についても同様に言える。その意味では、三平方の定理を三角形の十全な理解に含むと考えていたアルノーに対して、それは三角形の固有性であって実体の観念を知解するためには不必要であると述べたデカルトの答弁をも受け入れたと考えてよいだろう。

ある。しかし、デカルトにあっては、様態はそれと紐づけられる実体なしには理解することができず、さらにそれは常に不十全な認識に留まるとされたのに対し、アルノーにおいては、実体に対する「明晰な注意」をあえて払わなくとも、「実体と様態の関係が曖昧ながら様態の中に含まれている」ことが肯定的に捉えられるので、様態を通じて実体に関する認識を、もちろん曖昧なことも多々あるとしても、獲得することが可能になるわけである。このことは、たとえばアルノーがたびたび援用する重さの事例で考えると、たしかに重さは不明瞭な観念であり、それゆえ明晰ではないが、しかし、ものが落下するという自然現象の中には、重さについて解明するためのさまざまな様態の観念が含まれており、それらを判明に分析することで、真なる様態を選び出すことが可能になるということである。ここには、重さの解明にあたって、明晰な観念である延長とその運動から出発するというアプリオリな道程を採用するデカルトとの決定的な差異がある。ここに生じたデカルト主義との亀裂が、『ポール・ロワイヤル論理学』の特異点であり、テクスト全体の構成の蝶番となるポイントである。

3/とはいえ、この箇所は微妙な言い回しのように思われる。というのも、一方で、様態を明晰に認知するためには実体と紐づけされていなければならないが——すでに見たように明晰判明な認識は事物の本性についての知識である——、しかし他方で、実体と切り離されても様態は判明に認知され、そしてそれを相互に整合的な仕方でも組み合わせることによって、われわれは学問的な知識を得ることができるというのだから。

実体と紐づけられた様態の明晰な観念について十全に解明するには、パスカルの「原始語 *mots primitifs*」の概念から想を得たと思われる原始的名辞 *termes primitifs* (LAP. 141) まで辿る必要があるが、本稿ではそこに至るまでの段階で、様態の観念をいかにして判明に得るのかという点のみを見ておくことにしよう。すなわち、「基体へと判明で明瞭な注意を向けることなくして様態を認識する」ところの「抽象」という操作についてである。

2-2. 様態の抽象

第1部第5章は、「実体についての判明な反省を行わなくても、その様態について考察できる」(LAP. 184) と述べて、抽象 *abstraction* すなわち切り出し *précision* による、実体からの様態の切り分けについて詳述している²⁰⁾。ここでアルノーは抽象を三つのタイプに区別しているが²¹⁾、本稿の主題と直接関係するのは、第二の

20) 池田真治、前掲報告書、p. 107-112 は、『ポール・ロワイヤル論理学』における抽象理論を扱っている。なお、*abstraction* にはラテン語の *abstraho* (～を引き抜く) の語義が色濃く残っており、ここでの「抽象」についてもまずはこのことを念頭に置いておく必要がある。

21) 第一は、「精神がほかの部分を考慮せずに、ある部分だけを考慮することに専念する」場合で、これは対象を小部分に分割するという『方法序説』で示された第二の公準に相当し、第三は、「同じものがさまざまな属性を持っているとき、他方の属性を考えずに、一方を考える」場合で、これは理性的区別 (*distinction de raison*) に相当する。この三つのタイプから看取できるように、『ポール・ロワイヤル論理学』の抽象理論は、個物ないし実体から精神によって普遍的なものを抽象するという實在論ではない。それよりも、むしろ実体に対する反省を括弧に入れつつ属性や様態を抽象し、それらを相互に結び付けていく思考の技法のこ

「実体に注意せずに、ひとつの様態を考察する場合、あるいは同じ実体のうちに一緒に結合している二つの様態をそれぞれ別のものとみなして考察する」場合である。これがデカルトによる様態的区別に相当する。様態的区別には、デカルトにおいては、様態間の区別および様態と実体間の区別という二つがあったように、ここでも図式的にはアルノーは先達に従っている。しかしながら、微細な点においてデカルトから隔たっているように思われる。

第一に、様態間の区別については、デカルトが様態的区別に与えた不十全な認識という認識論的地位を越えて、様態的区別によって「ものをさまざまな様態に分けることができればできるほど、精神はそれをよりよく知ることができるようになる」(LAP. 186) と言うように、その不十全性よりもむしろ有用性の方を強調しているように読める点である。この事例としてアルノーは、運動を運動そのものとその方向決定 *determinatio* (ベクトル量を意図していたが概念的には瑕疵を含んでいた) とに区別すること、さらに方向決定をいくつかのそれに分解すること(力の分解に相当する)といった、デカルトが光学研究で実践した事柄を挙げている²²⁾。とはいえデカルト自身は、運動を思惟のうえでは自由に分解したり合成したりできることを認めつつ、同時に運動そのものの実在性を主張しているので、実在と様態の紐づけはやはり維持しようと努めているように感じられる²³⁾ のに対して、アルノーは、実体をカッコに入れて様態の析出、分析の方に専ら関心を示す。

第二に、対象の構成要素に順次注意を向けることで、諸様態を抽象していくという点である。例としてアルノーは幾何学的概念の抽象について述べているのだが、それによると、幾何学者は、縦・幅・横をもつ延長物体を自らの学問の対象と定めたいので、まず、その延長物体の一つの構成要素である縦(一次元の量)を抽象することで「線分」を、次いで、縦と幅(二次元の量)を抽象することで「面積」を、最後に、横を抽象することで三次元に至り「立体」を定めた、と言う

とであり、大枠としては、デカルトの実在的、様態的、理性的「区別」と同じ土俵で論じられている。

- 22) 「屈折光学」においてデカルトは、光を粒子の運動としてモデル化したうえで、たとえば反射では「運動」は変化しないが「方向決定」が変化するとし、両者の概念的区別を設定した。この際のデカルトの説明には瑕疵があることをフェルマがいち早く指摘していたが、こうした物理概念そのものはデカルトの死後もさまざまな解釈を惹きつつ引き継がれていた。武田裕紀「初めに光ありき——知の基軸としてのデカルト光学」、金森修編『合理性の考古学』東京大学出版会、2013年所収。
- 23) 実際のところ、これは観念の問題のみならず、分析という学問の方法に繋がる主題である。分析(解析)については、「方法」を扱っている第4部の中の第2章で詳細に論じられている。そこでは、対象を分解し、未知の項と既知の項とに区別し、それらを「明瞭(*nettement*)かつ判明に」(LAP. 524) 認識することを求めるのだが、その際に『規則論』や『方法序説』の4つの公準が引用され、デカルトからの強い影響を感じさせる。『ポール・ロワイヤル論理学』におけるデカルト主義の核心のひとつは、観念の形而上学的な身分よりもむしろ、観念を介した分析的方法にあり、それゆえ様態の抽象により適切に区別された判明な観念が、学問的探究にあたって実質的に有効な手段として推奨されることになる。

山下正男「西洋論理学史における『ポール・ロワイヤル論理学』の意味」『人文学報』第45号「西洋論理想史の研究」京都大学人文科学研究所、1978年、1-28頁の27頁では、『ポール・ロワイヤル論理学』におけるデカルト主義の要素として、観念主義と数学主義を挙げて、前者が第1～3部、後者が第4部に反映されているとする。

(LAP. 184-185)。これは、点、線分といった幾何学上の定義が先に与えられて、それを合成していくことによって立体に至るアプリオリな構成とは、逆の方向である²⁴⁾。

この件は、幾何学的観念の根拠についての問いを惹起する。というのも、『ポール・ロワイヤル論理学』はある種の生得観念を認めており、そうすると、「幅がなく長さだけある」というような線分の数学的観念は、生得的に得られた観念の典型となるはずのものであるが、ところが、この箇所では線や面が「延長物体」から抽象されるというのだから。アルノーはここでは伝統的な抽象主義を支持しているのだろうか。

そういうわけではない。アルノーがこのように数学的観念を延長物体と対応づけようとする理由は、自然界に存在しない線（幅がなく長さだけあるもの）を想定しているという理由で数学の確実性を否定する激越な懐疑論者に抗して、数学的観念が単なる虚構物ではないことを示すためである。彼がここで言おうとしていることは、幾何学者たちは、延長物体を「長さという一つの次元に即して」（LAP. 184）考察するように着目したということだけであって、その際に延長物体にあてがわれた数学的観念が、精神の内から来ているのかそれとも外から来ているのかという合理論と経験論の分水嶺となる問いは、不問に付されたままになっている。つまり、数学的観念の存在論的身分は宙づりにされたまま、実体から切り離された様態の観念として操作上の独立性が強調されるわけである²⁵⁾。そうして得られた様態は、たしかに実体との紐づけが十分に確保されていない非十全な認識であるとしても、それらが多ければ多いほど、そして整合的な仕方で相互に結び付けられるほど、ものをよりよく知るための契機を提供してくれるのである。

まとめ

観念の明晰性と判明性という限定された主題を、『ポール・ロワイヤル論理学』第1部の前半のみに焦点を当てて論じるという、当初は比較的ささやかと考えていたわれわれの論攷は、思いのほか多岐にわたる論点を含むものになってしまった。そこで、本稿の論述を辿り直しつつも、ただしデカルトの学説を省きつつ、『ポール・ロワイヤル論理学』の観念論を要約しておこう。

24) Vincent Jullien, *Éléments de géométrie de G. P. de Roberval*, Paris, 1996, p. 74 や、B. Pascal, *Introduction à la Géométrie*, in *Pascal, Œuvres complètes* IV, Jean Mesnard (éd.), Desclée de Brouwer, 1964-92, t. III, p. 435-37 などでも同様の順序になっている。Jean-Luis Gardies, «Arnauld et la reconstitution de la géométrie euclidienne», in *Antoine Arnauld Philosophie du langage et de la connaissance*, éd par Jean-Claude Pariente, Vrin, 1995, 13-32.

25) 先に注であげた第三の抽象、「同じものはさまざまな属性を持っているので、他方の属性を考えずに、一方を考える」の具体例として、個別的な正三角形の観念から一般的な三角形の観念を抽象していく例—この場合偶有性である—が挙げられていて、『ポール・ロワイヤル論理学』のもつ経験主義的側面が現れている。こうした事態についてシルヴァン・オルーは、「抽象は、観念間のあるいは観念についての諸操作の関係を表すものとして解される。逆に、発生的な仕方ですべてこれを解釈することもできる。それは、感覚から出発して、観念の生成の図式を構成するといったようなことである。このため、経験論／合理論といった区別は、経験主義が抽象の理論に依拠しているかぎりでは、ポール・ロワイヤルの論理学的伝統の定義と無関係になるのである。」Sylvain Auroux, *La Logique des idées*, Les Editions Fides, 1993, p. 66.

第一に、観念の明晰性に対する判明性のプライオリティである。観念はまず初めに相互に区別されなければならない。そこには、たしかに曖昧な観念も含まれているが、できるかぎり判明な観念を選び出して、それらを相互に妥当な仕方では結合させることによって、明晰な認識を得ることができる。判明性の根拠はその名辞を用いる人々の万人の一致に求められるが、だからといって唯名論的な知識というわけではなく、明晰な認識にまで至りつくことができれば、我々はものの本性に関する知識を得ることができる。

第二に、観念が判明 distinct であることがかくも重要性を帯びる以上、また精神と物体という互いに独立した実体から成る厳格な二元論を受け入れる以上、デカルトに倣って、実体の観念と様態の観念に関する観念間の区別 distinction に立ち入る必要がある。まずは実体の観念を相互に区別する必要があることを認めるアルノーは、この際に、デカルトにおける実在的区別とその際の操作である「排除」ないし「否定」を肯定的に受け入れた。

第三に、しかしながらアルノーは、実体についての明晰な観念なしに様態の観念を考察できる点をきわめて肯定的に評価した。つまり、実体についての明晰な認識がなくとも、我々の思惟がある対象から特定の側面を「抽象」することによって、その実体の様態を認識し、実体とその様態を区別したり、様態同士を相互に区別したりすることが可能になるというわけである。そしてそのように考察した様態のリストが完全であればあるほど事物の明晰かつ判明な解明に近づくことができる考えた。自然的な事物については、「その観念が、我々にその対象のうちにある全てを表示する時、それは完全であり、その観念がそれを明晰判明に認知するのに十分であるほどに、それを我々に表示する時、それは明晰である」(LAP. 211)。

(追手門学院大学教授)